



機鋒

TOUGEN NEWS

7月1日(火)

発行所 桃源院
発行責任 機鋒院 広報部
〒191-0005 日野市旭が丘3-1-4
編集 河野覚然 奥野麻子
042-683-1133
<https://www.mono.or.jp>

晴好雨奇 (せいこううき)

「晴好雨奇」とは、晴れた日も雨の日も、それぞれの天候が持つ美しさを楽しむことができるという意味の四字熟語です。晴天の景色はもちろん美しく、雨の日の風景もまた趣があり、どちらも素晴らしいものだという見方を表しています。この言葉は、中国の詩人蘇軾の詩「湖上に飲む初め晴れ後雨ふる」に由来しており、「水光潋灩として晴れ方まきに好く、山色空濛として雨も亦た奇なり」という一節から生まれました。自然の美しさをどんな天候でも楽しめるという考え方は、人生の捉え方にも通じるものがありますね。晴れの日も雨の日も、それぞれの良さを見つけることができると、毎日がより豊かになるかもしれません。

小学生時代の梅雨前、親から買ってもらった長靴を早く履きたくて、玄関にその新品の長靴を置いていました。雨の日を今か今かと待っていましたが、そんな時は晴れが続くもの。ようやく雨になると「待ってました」とばかりに長靴を履き、水たまりを駆け回っていました。雨の日が楽しかったのです。きれいな水たまり、濁った水たまり、深いものや浅いもの。雨あがりに射す陽の光で、水たまりは、鏡のように上空の青空や周りの景色を映し出し、覗き込むと自分の顔も映ります。

仏教の「一水四見」という言葉は、「同じ水でも立場によって捉え方が異なる」ことを意味します。4つの立場は以下の通りです。人間にとって→飲み物。魚にとって→住みか。天人にとって→寝床。餓鬼にとって→飲もうとすると火に変わる苦しみ之源。

このように、同じ水でも命の源になったり、苦しみの原因になったりするのです。この「一水四見」の意味をもう少し広げれば、「同じ物事でも、立場や見方が変われば違った景色が見えてくる」と解釈できるのではないのでしょうか。

雨を例にとると、今から出かけようとしている人には「足元を悪くさせる障害」であり、時には洪水や土砂崩れなどを引き起こす「災害の原因」です。一方で、農業をしている人には「作物を育てる恵みの雨」にもなり得ますし、梅雨自体は夏を迎えるにあたって水を貯える準備期間と捉えることもできます。

ですから、雨降りだからといって一概に「悪い」とも言えませんし、反対に「良い」とも言えません。私たちの身の回りにあるものや出来事は見方一つ、心持ち一つで多様な姿を見せてくれます。

禅では「良い⇔悪い」であるとか「美しい⇔醜い」などといった対立的な考え方を嫌います。世の中の事象はあるがままで変わらないはずなのに、私たちの心が「良い」とか「悪い」という区別をつけて、優劣や差別をしたがる、レッテルを貼りたがる。その結果が迷いや苦しみの原因になり得るからです。

新人御挨拶



宮城県石巻市の出身です。

住職・奥野誠也老師の親戚で、今年1月より桃源院・東京別院に勤めています。

駒澤大学にて仏教・禅について学び、大学院では日本に曹洞宗を伝えた道元禪師の『正法眼蔵』を中心に研究しました。

修士課程を修了後、神奈川県・鶴見の大本山總持寺の門を叩きました。多くの部署を経験し、令和6年11月末、約4年の修行を終えました。

わげんあいご
「和顔愛語」(和やかな笑顔をたたえ、優しい言葉を用いてお話する)の精神を大切にいたします。

合掌



主に、事務やSNSの更新をしております。日々、曹洞宗の教えを学ばせていただきながら、精進してまいります。

何卒よろしくお願い申し上げます。



主に、事務や電話対応等を担当しております。一生懸命勉強しながら、円滑に仕事が進むようにいたします。

何卒よろしくお願いいたします。

別院
春彼岸供養会本院
春彼岸供養会

本院役員と記念撮影 別院



本院 夕景



菩提達磨

西方より東方への
法の伝搬

菩提達磨 (ぼだいだるま) 「?」五二八

波斯国(イラン) 或いは南天竺(南インド)の第三王子に生まれたと伝わる。般若多羅の法を嗣ぎ、中国へ渡来した。嵩山の少林寺にて、面壁して九年間坐禅を続けたと言われている。

梁(南朝五〇二〜五五七)の武帝(高祖武帝五〇二〜五四九)みずから佛銘を造り、太宗(太宗簡文帝五四九〜五五五)より円覚大師の諡号をおくり、昭明太子(武帝の長男 文学者)の祭文には聖哲大師の号も残る。禅をインドから中国に伝えたことで、中国の禅宗の始祖と呼ばれる。

梁の武帝(姓は蕭、諡は宣、字は叔達)は、中国南北朝時代の英雄です。齊の宰相から梁公に封ぜられ、五〇二年に三十九歳で即位しました。北魏と対峙し、四十八年間在位し、五十四年に八十六歳で崩御しました。

彼はもともと勇敢な英雄でしたが、仏教に帰依してからは平和主義者になりました。大通元年(五二七年)に同泰寺で得度し、その後の数年で完全な平和主義者となったようです。晩年には若い頃とは正反對の絶対的な平和主義者となりました。

太清二年(五四八年)の八月、当時武



侯景の入城

帝の部下であった侯景が反乱を起こした際、平和主義者になった武帝は積極的にはこれに対処しませんでした。逆に、翌年の二月には反乱を起こした侯景を宰相に任命したので

反乱を起こし王城を包囲します。城の防衛兵たちは反乱軍の威圧に恐れおののき、武帝には側近の兵もいなくなり、侯景の兵士たちが剣を持って武帝の近くに迫り、武帝の部屋に入ると、武帝は静かに座っていました。その威厳に

兵士たちは恐れおののき逃げ帰ったので、結局、侯景は武帝を兵糧攻めにしました。その結果、その年の五月、武帝は静かに息を引き取ります。

武帝が達磨と会ったのは「景德伝灯録」によれば普通八年(五二七年)のことです。達磨は三年かけてインドから広州に到着しました。それが九月二十一日です。

「重演に況で、凡そ三周の寒暑、南海に達す」と記されています。南海とは現在の南越(ベトナム)のことです。



武帝の最後

た。帝都は金陵、現在の南京です。こうして達磨は十月一日に金陵で武帝と会ったのです。

武帝が尋ねました。「私が即位してから多くの寺を建て、經典を書写し、多くの僧を救済してきました。これにはどのような功德がありますか？」

達磨は答えました。「それらには功德はありません」

武帝が続けて尋ねました、「なぜ功德がないのですか？」

達磨は答えます。「これらは、この世の成果であり、有漏の因果関係に禅はその影響を受けません」

武帝が尋ねました。